緑の架け橋

会報第 28 号
（協賛会員登録呼掛版）
2016 年 9 月 1 日
日中緑化交流基金助成事業
IFCC プロジェクト代表：佐藤晴男
協賛団体：NPO 法人アジアンロード

二年目の寧夏・固原市、内モンゴル・多倫県の植林

IFCC では草の根交流で「日中の緑の架け橋を」と呼びかけ、2015 年度日中緑化交流基金助成事業（～2016 年 10 月）で日中緑化植林活動を継続しています。

～緑を末永い友好の礎として～

固原市の事業地　2016 ・5・14

「今」だから緑の架け橋を

2002 年 11 月緑の架け橋推進センター設立し、その後推進母体の改編を行いながら足掛け１３年となりました。

これは日中緑化交流基金の助成を得た事業主催・ＩＦＣＣ国際友好文化センターの呼び掛けによるものです。

2008 年 11 月、緑の架け橋推進センター解散。その後、「緑の架け橋」の活動は、事業主催の IFCC 国際友好文化センターの下で「緑の架け橋プロジェクト」として継続され、2014 年まで９つのプロジェクトを実施、終了。累積 205 人が参加。

2014 年度（11 月開始）から、NPO アジアンロードを推進協賛団体として内モンゴル 2 ヶ所、IFCC 単独で寧夏回族自治区１か所を開始。

2 年目となった今年は 2016 年５月 13 日から寧夏回族自治区固原市、７月 21 日から内モンゴル多倫県で２件をそれぞれ実施。

IFCC は「緑」を末永い友好の礎としていきたいと思っています。

灤河源の事業地　2016 ・7・22

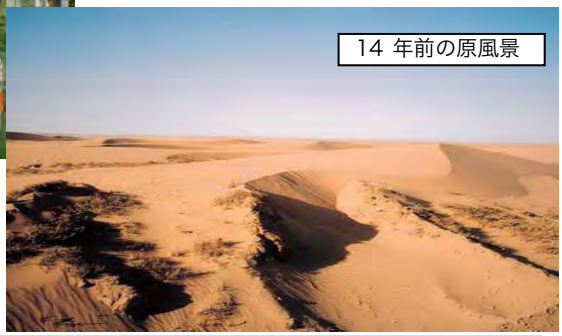
本会報は会員以外にも送付しております。趣旨協賛いただける方はどなたでもご参加できます。活動へのご協力をお願い致します。

IFCC 国際友好文化センター
〒162 -0801　東京都新宿区山吹町 333　辻ビル 405
TEL.03 -3268 -4387　　FAX.03 -3268 -6079
口座：中央労働金庫市ヶ谷支店（普)08581 19　　郵振：00130 -9-425994

会報は事業主催（ＩＦＣＣ）の植林プロジェクト特集となります

今回も植林活動の出発点（2003年植栽）となった紅寺堡を訪ねる

町の発展で都市計画が変更され記念碑の場所は移転されていた。



2016 年度（２２回）植林緑化派遣団活動

日中青年寧夏固原市生態緑化モデル林（二年目）植林活動報告

実施日：2016 年 5 月 12 日～17 日
大分県　臼井　隆

固原市の 2 年目事業地・記念碑の前で（2016・5・14）

今回、公私にわたり 40 年来のお付き合いのある佐藤晴男団長のお誘いを受け、初めての参加だった。私も現職時代は地方自治体の林業関係の技術職だったので大陸の荒野の緑化についても大変興味があった。

出発前日(12 日)の夕 6 時から事前打合せがあり、国際友好文化センター（IFCC）事務局長の鎌田さんから事業の概要、経過、実績並びに今回の日程等の説明があった。

今回は、初日に本事業の最初の事業地（寧夏紅寺堡生態緑化モデル林（2002 年～2004 年）である呉忠市紅寺堡植栽地の生育状況視察、2 日目は日中青年寧夏固原市生態緑化モデル林（2014 年～2017 年）の昨年の事業地の視察と植樹を実施、3 日目は六盤山森林公園の視察、最終日が北京の中国国際青年交流センターの表敬訪問を行う 4 日間のスケジュールである。

13 日は午前 8 時 30 分発のため、6 時 30 分に羽田着。飛行機は 30 分遅れで離陸、12 時 30 分北京着。予定より 30 分遅れたうえに到着ロビーまでのバスが来るまで 15 分程度その場で待機、かれこれ 45 分遅れとなった。到着ロビーには全日程同行してくれる IFCC 北京事務所の刘（リュウ）さんと中国国際青年交流センター環境保護基金部の崔斌（サイ）さんが出迎えてくれた。到着が遅れたために北京から当日の目的地銀川への乗り継ぎ（13 時 25 分発）に間に合わずアウト。　次のビンは満席でキャンセル

待ちしたがこれも取れず午後 9 時の最終便となった。初っぱなからアクシデント発生。先行き不安なスタートとなった。　その為、銀川には夜中に到着、にもかかわらず寧夏自治区委員会工農青年部副部長の温さんが飛行場で出迎えホテルまで送り届けてくれた。

当日は北京も銀川も雨、年平均降雨量 200 ミリしか降らない寧夏では大変珍しく、植樹用の雨でしょうと、温さん。

14 日　翌、14 日は朝 9 時 30 分に専用車で呉忠市紅寺堡に向けて出発。高速道路を南下するが、市街地を抜けると徐々に農地や原野が目に入ってくる。進むにつれて緑が少なくなってくる。水田も目に入ったが広大な広さの中に日本と同じような小区画（１０００平方メートル足らず）の水田である。大きな区画にして作業効率を上げたらと思うが、区画を大きくすると水平を確保するのが難しいため小区画にしているとのこと。

しばらくすると両サイドに山肌がむき出しの丘陵地帯が広がってくる。黄砂の発生源の一部とのこと。小規模な風塵が舞い上がるなど黄砂を想像させる光景も見えた。また、比較的平坦な箇所には太陽光パネル、小高い山には発電用風車が設置されているが、高速道路の両側に数十分車が走る距離連なっている。高速から見えないところにもあるはずなので想像を絶する規模の大きさはさすが大陸。ただ、風車が止まっているのが多数あり、訳を聞くと、地産地消が原則のためこの地域では電力が過剰状態のため調整中とのこと「もったいない」。水田の広さや風車の運転調整、いかにもこれが中国的かもしれない。

昼前に紅寺堡に到着、現地の関係者と合流、さっそく最初に植栽した事業地に向かった。道中、佐藤団長が植えた場所が分からなくなったと首をかしげていた。14 年もの時間が経ったからかなと思ったが風景が変わってしまったからだとのこと。

当時は、建物は僅かで道はぬかるむような砂利道、今は開発が進んで舗装道路が整備され、多くの建物が出来、小さな街になっていた。　インフラ整備が進んだのは本事業で地域の緑化が図られ環境が改善された事も要因の一つとのこと。

一方、開発が進んだ為の弊害もあった。本事業で植栽した区域の一部が関係者に協議もなく道路用地（政府の事業）として掘り返され、「植栽記念碑」も破壊される事件が発生。事後、両関係機関が協議し、樹木の移植と記念碑の建て替えが行われた。

胸高直径が 15cm になったポプラ
（紅寺堡　2016 ・5・14）

最初の植栽地には、ポプラ、アカシア、ヤナギ、ナツメ、などが植栽されているが、ポプラは胸高直径が１５センチメートル前後になっている。日本ならもう少し成長するのかもしれないが、厳しい環境の中では評価出来るのではないか。今でも乾燥が長く続く場合は、灌水していうそうである。植栽後、散水施設を設置し一定期間灌水を実施している。

いまだに灌水用ホースがある
（紅寺堡　2016 ・5・14）

道路用地として掘削、破壊された箇所とその移転先も見学した。

昼食後、次の調査地固原市に向けて更に２時間半程度まっすぐな片側２車線の高速を南下。銀川から固原市は、ほぼ南北に高速で約５００Km,その中程が紅寺堡という位置関係である。

午後４時頃固原市着、共青団固原市委員会書記　馬天峡と馬小路の両馬さんが迎えてくれた。現地は固原清水河国家湿地公園内の沈家河ダム（貯水、洪水調整、灌漑）周辺の丘陵河谷地帯でダムの水源確保も視野に入れた緑化計画地。2014 年～17 年の足かけ 4 年、実質 3 年間で 84 ヘクタールの植栽。2015 年と 2016 年の春に植栽を終えた現地に入った。

雨水を効率的に利用する植栽手法か
（固原　2016 ・5・14）

事業地は黒土と黄土が中心で土壌構造は柔らかく有機質の含有量は

少なく、土質部分が深く、植物の生育には適していると現地調査結果が示されている。しかし、常に日本の植栽地（林地）を見てきた私には地表植物状態、土の色、堅さなど外見上からは少なくとも植物の生育に適しているとは言い難く見えた。地ごしらえ（整地）は植穴を掘り上げて周囲に集水用の土手を積み上げている。（魚鱗抗整地と表現をされている）

雨水を効率的に植栽木の根元に導く手法だと考えるが作業の難度が想像できる。作業経費の比率は整地に５０％、苗木４０％人件費１０％とのことだった。

これまでの活着率は７０～８０％程度、事業者に対し2年間の植え枯れ保証を課して居るとのこと。2015年及び2016年春の植栽地を見学、最後に障子松（トドマツ、エゾマツの仲間と思われる）を佐藤団長とともに記念植樹を終え宿舎に向かった。

固原市の事業地で記念植栽（2016・5・14）

15日は快晴のすばらしい天気に恵まれた。 9時に宿舎を出発。六盤山森林公園の視察である。移動の途中、図らずも緑化用苗木の生産地を通った。車窓からは障子松が目についたが数多くの樹種が栽培されている。その地域は苗畑一色で他の作物は見あたらない。また、20～30分車で走る間全て苗畑であり、ここでもスケールの大きさをあらためて思い知らされた。銀川から固原までの車窓の風景を見ても植栽対象地は限りなくある。当然苗木もそれ相応に準備が必要なわけである。

六盤山森林公園は海抜2000メートル～3000メートルの間に位置し、植物は600種、ヒョウも生息し、動物や鳥類等200種余りが見られ、1988年に自然保護のため国立公園として指定された約２７０００ヘクタールの広大な区域である。この山は毛沢東主席が国民党との戦で南から北にむけて越えてきた所として国民の思い入れがあるとのこと。自家用車で入場、大きな嶺を越え少し開けた場所に着いた。そこは自然散策等が出来るところで、キャンプ場らしき場所、博物館、渓流散策コースなどが整備されている。我々は渓流を散策した。天気にも恵まれ爽快な気分で自然を満喫した。ただ残念だったのは順路には案内用のスピーカーがあり、説明が流れていたが説明の無い間は音楽が切れ目無く流される。折角の渓流の水の音や、鳥の声、森をわたる風の音などを静かに楽しむ為には無用の音でした。

現地視察はここを最後に銀川に向かって出発。帰りは来た道数百キロを一路ひたすら北上となる。銀川が近づいたころ大きな川を渡った。黄河である。往路では気づかなかった。黄河も上流なので川と分かる位の川幅であるが水は正に黄色。地図を見ると黄河は多くの支流を持っているので本流の黄河をあらためて目に焼き付けた。

16日は中国最後の日、銀川の空港を発ち、北京へ。北京では本事業の中国側の実施主体である中国青年連合会の本部を表敬訪問。中国国際青年交流センター副主任の洪桂梅（女性）さんと同センター環境保護基金部長の王希宏さんが迎えてくれた。昼食をしながら事業の進捗状況や今後のスケジュール等について説明を受けた。

これまでの実績は2002年～2015年の14年間で12ヶ所において面積で約2450ヘクタール余り。本数で740万本余りの植栽、活着率は平均で70から80%を確保している。（一部は植え枯れ保証制度あり）とのこと。悪条件下での植栽とその後の管理の苦労が忍ばれる・また、これだけの成果を確保した要因は若い方が積極的に事業に携わっていることだと感じた。

佐藤団長は各地のあいさつの中で「日中政府間では何かとぎくしゃくしたものがあるが、本事業は生態環境の改善は元より植栽された樹木が日々生長していくように日中間の民間レベルの交流の輪が広がり育つことを確信している」と述べ、ソフト面でも大きな成果が生まれることを期待していることが伺えた。

短期間の視察、移動に大半を費やした感もあるが、悪条件の中での植樹による生態環境の改善事業とそれにかかわる情熱的な人々に接する事ができ、自分にとって貴重な体験であった。更に10年度の成果を見てみたいがこの歳では無理かな。

事業地を遠望する（2016・5・14）

２年目に入った蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクト、中日青年灤河源生態緑化モデル林事業（内モンゴル・多倫県）

「2016 年植林と草原の風にふれる旅」に参加して
特定非営利活動法人アジアンロード　副理事長　木原　勇

補植の後で（灤河源　2016 ・7・22）

補植をする（灤河源　2016 ・7・22）

2016 年 7 月 21 日（木）～26 日（火）の期間、中国・内蒙古自治区シリンゴル盟多倫県にて「中国青年灤河源生態緑化モデル林事業」「蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクト」に、アジアンロードから、理事長宮秋道男、副理事長木原勇、参加会員鈴木昭子さん。また、IFCC（国際友好文化センター）から鎌田事務局長ご夫妻を合わせて 5 名が参加した。

今回は、「植林と友好の旅」として通算 22 回目であり、IFCC（国際友好文化センター）としては「IFCC 緑の架け橋プロジェクト」、アジアンロード企画では、「モンゴルの風にふれて」をそれぞれのテーマとして位置づけた。

21 日午後、到着の北京国際空港第 3 ターミナルでは、劉憲良 IFCC 北京事務局長と中国国際青少年交流中心の崔さんの出迎えをうけ、劉さんが「お疲れでしょう。お腹も空いたでしょう」と声をかけ、全員でラーメンを舌鼓。食後、19 人乗りのマイクロバスに乗車し多倫県まで移動した。

北京国際空港を出てから、多倫県には 19 時過ぎに到着し、多倫県書記・王佛朋、多倫県副書記・王清貨、林業局林権中心主任・張達根、蒙古自治区中国国際青年連合会秘書長・格日楽図内、内蒙古青年連合会課長・吉並太、元青年連合会・靳志海ら各氏の熱烈歓迎をうけた。

22 日は、3 か所の中日青年多倫県生態緑化モデル林事業の取り組みについて、現場を訪れた。

張連根林業局長から「植林が始まってから、しっかり根が生えているころ」「樟子松を植林している。5 年過ぎると、人の背丈を超えて大きくなる」と。また、「この事業を 9 年間やっていて、これは、歴史や文化を継承することと同じである」と力説されていた。

記念植樹として、数本の苗木を持ち、等間隔に穴を掘り、苗木を運び下し、土で埋める作業を行った。なお苗木は、一本 15 元（240 円）とのこと。

保育状況を見る（蒙京津冀　2016 ・7・22）

一見、草原地区と目には入るが、年間降雨水量が少なく、砂漠地区であった。

最終日、北京市内にある中国国際青年交流センターにて、王希宏部長・羊強振課長と面談。

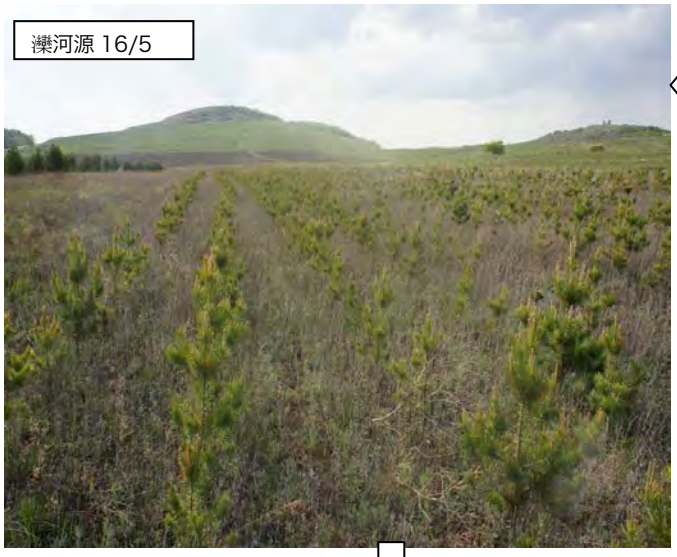
私たちの継続した関わりに、感謝されるとともに、改めて、訪問の意義とこれからのかかわり方に返礼があり、今後も連携していくことをお互いに確認をした。

王部長は「多倫県では、元々大きなプロジェクトとして植林を行ってきた。そこにこのプロジェクトが重なり、さらに、体制が強化されている。今後も日本と中国がこの植林によって架け橋となり、友好が継続されることが大切」と、強調。

植林から見える、文化・習慣、伝統・友情等、今回も多くのことを学んだツアーであった。訪れた植林の現場では、農地を 70 年かけて苗木から成樹へと時間をかける。1 メートルのびるのに 5 年はかかる。世代を超えた取り組みは、必ず次の世代に引き継がれ「ストップ砂漠化」と想いを馳せ、空港への帰路についた。

以上

内モンゴル・多倫県2015（2015年11月～2016年10月）事業地を見る



2016 年度（22 回）派遣団参加者		
佐藤晴男	固原市	IFCC ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ代表
臼井　隆	固原市	大分
宮秋道男	多倫県	NPO 亜洲道路
木原　勇	多倫県	NPO 亜洲道路
鈴木　昭子	多倫県	NPO 亜洲道路
鎌田篤則	多倫県	IFCC
鎌田　雪	多倫県	IFCC
劉憲良	固原市・多倫県	IFCC 北京事務所